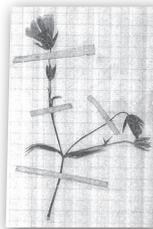


庭の荷風の庭



文化人類学的・博物学的思考、理系感覚の人
——荷風の文芸世界を訪ねる

訪問者 坂崎 重盛

土手行けば夏の草付く日和下駄（露）

今日でも人気の衰えない作家・永井荷風と、その作品を味わうことについて、ぼくは、いつのころか、ある角度というか、「色眼鏡」で見る楽しみを抱くようになった。

数多くの文学者、文芸評論家などが、さまざまな切り口、アプローチで荷風と取り組み、語ってきたが、それらの仕事から（ぼくの知る限りではあるが）ほとんど見過ごされている、ある視点に気がされた。色眼鏡と言ったのは、ぼくの、その視点、角度が、ひとつのフィルターのようなものだろうと思ったからである。

密かにこの偏光レンズの眼鏡をかけて、荷風本を手にとり、ページをめくっていると、新たな荷風世界が浮かび上がってくるように思えて、なかなか楽しい。ときに、ひとり口元に微笑を浮かべている自分に気づくことさえある。

そんな荷風大人に対する、ぼくの色眼鏡とは——。この際、ひと思いに言ってしまうおう。それは「永井荷風という作家における、理系感覚」である。

荷風の来歴と生涯はおいおい述べてゆくことになるが、ざっと概観すれば、江戸儒者の気配の中で育ち、芸事の世界に憧れ、フランス象徴詩の洗礼を受け、明治の新婦朝者の一人となり、江戸追慕に身を染め、場末の歓楽街を日々徘徊する。なれ親しんだこの荷風が「理系感覚？」と思われるのも当然である。

で、あるからこそ、ぼくは、この「理系感覚の作家・荷風」という色眼鏡を手にしたことに少しワクワクし、それを用いて、荷風作品を大いに楽しむことにしたのである。

理系感覚という一本の補助線を引く

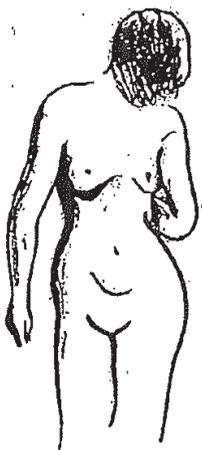
いま、キャッチコピー的に理系感覚と言ってしまうが、より正しく言おうとすれば、加えて博物学的、または文化人類学的志向、センスである。



龍崎花 花下草 花下草

【断腸亭日乗】所収

そういう荷風を味わうために、たとえば幾何学的用語で言うのなら——理系感覚という「一本



理系の学者には絵心のある人が多い。寺田寅彦による素描（岩波文庫『柿の種』）より

の補助線」を引くことによって、複雑な姿をとる図形の構造を浮かび上がらせ、その「解」を容易にすることが可能ではないかと思ったのである。荷風における理系感覚、あるいは博物学的・文化人類学的感覚と言ったが——荷風理解としては耳なれないことかもしれないので、なぜ、ぼくが、そういう思いに至ったか、どうしてその色眼鏡を手にすることになったか、少し話をしてみたい。

もう十年ほど前になるか、この雑誌の編集長Iさんと、世間話のような執筆企画のような雑談をしているなかで、ぼくは「理系の学者の名随筆を楽しむ」といったテーマ、というか思いつき企画を口に出したことがある。

ぼくは、もともと若いころから、たとえば物理学者